韓国語における統語的複合語
— 漢語の場合 —

佐　藤　　豊

1. はじめに

韓国語は系統的にはまだ日本語との関係が明らかになっていないが、類型論的には非常に日本語に近い言語である。[1] たとえば、(1) のような韓国語はほとんど逐語訳により日本語に翻訳することが可能である。[2]

(1)	Na-nun	tayhakkyo-eyse	hankwukmal-ul	kongpwu-ha-pnita.
	私ハ	大学デ	韓国語ヲ	勉強シマス

私は大学で韓国語を勉強しています。

主題を表す「nun」は、日本語の提題助詞「は」にほぼ対応し、[3] 主格の助詞（韓国語「-ka /-i」、日本語「が」）が別個に存在する。動作・出来事の場所を表す助詞「eyse」は日本語の助詞「で」に対応し、この助詞はものの存在を表すことはできない。存在を表す助詞としては、韓国語の場合「ey」、日本語の場合「に」という別の形式が存在する。また、対格を表す助詞「ul」には「を」が対応する。この対格の助詞は、日本語のそれと同様に通過点・起点を表すこともできる（例、「この道をまっすぐ行く」）。さらに、「-pnita」は日本語の対者敬語の助動詞「です／ます」に対応する。

このように類型論的に非常に似ている言語ではあるが、細かいところを見ると微妙に異なっている。たとえば、(1) の例に関して述べると、アスペクトの表現法が若干異なる。日本語では、文法的に動作継続を表す形式は補助動詞「いる」とともに表されて「勉強している」の形にならなければ、現在学習中であることは意味せず、将来において学習することを意味する。一方、韓国語においては補助動詞を用いて動作継続を表す形式が日本語同様に存在するものの、上にあげたように補助動詞なしに現在学習中であることを表すことが可能である。[4] その他の日本語と韓国語との相違点に関しては、『日本語と外国語との対照研究 IV　日本語と朝鮮語（上下）』(1997) [5] およびそこに記載されている参考文献を参照されたい。本論文では、塚本 (1995, 1997) [6] により日韓語の相違として挙げられた複合語化の問題を取りあげる。結論を先に述べると、塚本は、韓国語には、日本語において多く見られる統語的複合語が存在しないと論じたが、本論はコーパス調査の結果に基づき韓国語にも漢語を用いた統語的複合語が存在すると論じる。

塚本 (1995) は、日本語の生成文法において、使役構文・間接受身構文・可能構文・願望構文などが、複文の埋込み節の動詞を動詞繰り上げ (verb raising) することによって統語的に派生されること[7]を指摘し、韓国語には同じ統語的操作を経て派生される構文が存在しないと論じた。使役構文を例にとると、「太郎が花子に手紙を書かせる」という文は (2) のように、二つの節 (S) から出来ていると伝統的な生成文法においては考えられている。つまり、深層構造において、「太郎（が）＿＿＿させる」という主節に「花子（が）手紙（を）書（く）」という節が埋め込まれており、さらに、表層構造において、埋込み節の述語「書（く）」が主節の述語「させ（る）」に繰り上げられると想定されているのだ。

(2) ［s 太郎［s 花子　手紙　書（く）］　させる］

韓国語には、一見日本語の願望構文・使役構文に類似すると思われる構文が存在するが、細部を見ると両者の間には違いが見られる。

(3) 韓国語の願望構文・使役構文（塚本 1995: 65 の (8a) と (7a)）

a.	Nay-ka	umak-ul	tut-ko	siph-ta.
	私ガ	音楽ヲ	聞キ	タイ
	私が音楽を聞きたい。			
b.	Talo-ka	Hanakko-eykey	phenci-lul	ssu-i-ess-ta.
	太郎ガ	花子ニ	手紙ヲ	書カセタ
	太郎が花子に手紙を書かせた。			

(3a) の願望構文において、日本語の「聞きたい」が 1 語の派生語であるのに対して、韓国語の「tut-ko sip(-ta)」が 2 語からなる迂言的 (paraphrastic) な形式になっている。そのため、「tut-ko」の後には様々な助詞が来ることができ、「tut-ko-ka sip(-ta)」というように主格「-ka」が入ることも少なくない。これに対して、日本語においてはいかなる言語形式も介入することができない（例、「*聞きはたい」)。

また、(3b) の使役構文にある「ssu-i-ess(-ta)」においては、「ssu」が語幹（「書く」を意味する)、「i」が使役の形態素、「ess」が過去の形態素であり、一見日本語の場合と同様に複合語を形成しているように見える。しかし、この形式は「語彙的使役」と呼ばれるものであり、統語的使役とは異なると塚本 (1995) は論じている。彼は、(4) にあげた 5 つの現象が日本語の使役構文では可能であるのに対して、韓国語の語彙的使役構文では、いずれも不可能であることを論証した。(4a-d) は、埋込み節の主語である被使役者が様々な統語現象に参加することができることを示している。

(4) 統語的使役構文（日本語）

a. 受動化により埋込み節の主語となったものを、さらに使役構文の被使役者 (causee) として表すことができる。

b. 埋込み節の主語が再帰代名詞「自分」の先行詞となることができる。

c.「熱心に」などの副詞が埋込み節の主語（の行為）を修飾できる。

d. 埋込み節主語から数量詞の遊離が可能である。

e.「そうする」により、使役構文の埋込み節が表す行為を指すことができる。

塚本 (1995) は、また、影山 (1993)[8] が指摘した語彙的複合動詞と統語的複合動詞の対立にも言及し、後者の統語的な複合動詞（たとえば、「鳴り終わる」「飲み続ける」「咲き始める」等）は韓国語に存在しないと論じている。複合動詞 (V1+V2) が、語彙的であるか、統語的であるかに関しては、影山 (1993) に詳しく書かれているが、塚本 (1995, 1997) は、統語的複合動詞の V1 の部分には受動態の動詞や、尊敬語の動詞が現れる、つまり、統語現象に参加していることを指摘している。

さらに、塚本 (1997) は本論文の主題である韓国語の「動名詞」 (verbal noun)[9]を含む (5) (6) のような構文においても日韓語が異なると論じる（(5) (6) の例文・文法性判断は、ともに塚本 1997 のものである）。

(5)	?Haksayng-i	cosenmal-ul	yelsimhi	kongpwu	cwung-ey ...
	学生ガ	朝鮮語ヲ	熱心ニ	勉強	中ニ
	学生が朝鮮語を熱心に勉強中に…（塚本 1997: 199 の例文 (21)）				
(6)	*Ssal-ul	swuhak	hwu-ey ...		
	稲ヲ	収穫	後ニ		
	稲を収穫後に…（塚本 1997: 198 の例文 (18c)）				

(5)(6) の和訳にある、動名詞 (VN) に時を表す接辞が結合した形「勉強中」「収穫後」は、Iida (1987)[10] や Shibatani & Kageyama (1988)[11] により指摘された日本語の構文で、軽動詞がないのにもかかわらず、VN が動詞格といわれる対格や与格などとともに共起する構文である。この構文は日本語においては可能であるが、韓国語においては容認度の低い構文であると塚本 (1997) は指摘する。

塚本 (1997: 200) は、日本語の「VN 中」「VN 後」の形式が動詞格を付与することができるから、この構文は統合的な複合語であるとし、(5)(6) の韓国語の例文の容認度が低いのは、韓国語における「VN 中」「VN 後」の形式が語彙的複合であり、そのために動詞格が現れにくいからだと論じている。

塚本 (1997) は、その他にも照応関係などの統語現象に関与する名詞接辞・接頭辞が日本語

に存在し、それらは統語的接辞とも見られるものであるが、韓国語にはそれに対応するものがほとんど存在しないと論じている。

以上から、塚本 (1997: 208) は、形態理論が独立部門として語彙部門・統語部門の両部門に関与するという影山 (1993) のモジュール形態論は、日本語のような言語には適当であろうが、韓国語のような言語の場合、形態理論から統語部門への作用はほとんどなく、同言語には適用しなくてもよいと述べている。

塚本 (1997) が主張するように言語によって統語的な語形成を許す度合が異なり、韓国語の場合には日本語と比べて統語的な語形成の度合が低いとは思われるが、韓国語には「…形態理論から統語部門に向かう矢印の部分はほとんど作用しないのであり、その存在の意味が問われる」[12] という主張には疑問が残る。塚本の議論の中で、特に疑問となるのは (5) (6) に見られる「VN 中／後」を含む韓国語例文の文法性判断である。というのはこれらの構文に関して、韓国語母語話者の中に異なる判断が見られるからである。筆者は、同じ構文の例文に関して、複数の母語話者に文法性判断を聞いてみたところ、確かに塚本 (1997) が主張するように、それらを容認度が低い、あるいは非文法的だと判断する人が多かった。しかし、一方、韓国人の言語学者による論文においては、(5)(6) のような構文がくりかえし文法的な文として扱われている。[13] たとえば、Ahn (1991: 29) では、(7) の例文を根拠に、VN は軽動詞なしに動詞格を与えることができ、VN のカテゴリーは動詞であると論じているのである。

(7) Ahn 1991: 29 の例文 (35)（和訳は佐藤；文法性判断は Ahn のものである。）

a.	Yenghi-ka	yenge-lul	kongpwu	cwung-ey	hwacangsil-ey	ka-ss-ta
	Yenghi ガ	英語ヲ	勉強	中ニ	トイレニ	行ッタ

Yenghi が英語を勉強中にトイレに行った。

b.	Yenghi-ka	hangsang	hakkwa-lul	kongpwu	hwu-ey	J-wa	manna-ss-ta.
	Yenghi ガ	いつも	課題ヲ	勉強	後ニ	J ト	会ッタ

Yenghi が、いつも授業の課題を勉強後に J と会っていた。

本論文は、この対立する二つの立場を検証するために、韓国語の KAIST コーパス[14] を使って、「VN 中／後」構文の韓国語における位置をさぐってみた。

以下、第 2 節において調査の概要と結果を示し、第 3 節に考察を述べ、第 4 節に結論を述べる。

2. 調査の概要・結果

使用したデータベースは、韓国科学技術院電算科 CS lab において作成された KCP (KAIST Concordance Program) であり、そのコーパス内の「cwung（中)」「hwu（後)」が含まれる用例を検索した。KCP は 300Mbyte のコーパスで、日本語の文節にほぼ対応する「語

節 (ecel)」単位の索引で行うデータベースである。[15]

具体的には、(8) の形式を含む用例から、対格の項と共起する「VN 中／後」をさがし出した。具体的には、「cwung（中)」「hwu（後)」に「ey」(助詞）か「-i」(コピュラ）が後続する用例を検索し、さらに、その中から「VN 中／後」の形式で、なおかつ、VN の項が対格で表示されている用例を選び出した。

(8)

a.	cwung	ey
	中	ニ
b.	cwung	i-
	中	ダ
c.	hwu	ey
	後	ニ
d.	hwu	i-
	後	ダ

検索された用例の中には、(8) にあげた形式のみではなく、それに様々な助詞や接尾辞が接続した形式も含まれているので、「+」の記号を付する。[16]

表 1. KAIST 検索結果

検索形式	検索件数	対格共起用例
cwung-ey+（中に）	9,058	25
cwung-i+（中であ(る))	1,286	147
hwu-ey+（後に）	10,322	0 [17]
hwu-i+（後であ(る))	402	0

対格の項と共起している「VN 中」構文として (9) のような用例が見られた。

(9) 対格共起用例

a. Ilekhkey wuli il-ul chakchak cinhayng cwung-ey iss-ta.
コノヨウニ 我々 コトヲ ドンドン 進行 中ニ アル
このように我々の仕事をどんどん進行中だ。(KAIST 3707)

b. Mikwuk-ey iss-nun hankwukin-ey kwanhan yenghwa-lul
米国ニ イル 韓国人ニ 関スル 映画ヲ
kwusang cwung-i-ta.
構想 中ダ

米国にいる韓国人に関する映画を構想中だ。(KAIST 3664)

c. Cengchaksikhiki wihan yele kaci taychayk-ul malyen
定着サセル タメノ イロイロ 種類 対策ヲ 準備
cwung-i-n kes-u-lo allye-ci-ko iss-ta.
中デアル コトトシテ 知ラレテ イル
定着させるための様々な対策を準備中であると伝えられている。(KAIST 3660)

表 1 にあるように、「VN 後」で対格の VN の項と共起する例は見つけることができなかった。また「VN 中」のうち、「VN cwung-ey+」と共起するものは、25 例あったが、1 例を除いて、(9a) の例のように「cwung-ey iss-（中にあ（る））」という形式で現れたものであった。例外の 1 例は、以下のものである。

(10) Cenkwuk-ul swunhoy-kangyeng cwung-ey Tosan An Changho-uy…
全国ヲ 巡回講演 中ニ 島山 安昌浩ノ
全国を巡回講演中に島山安昌浩の… (KAIST 3707)

つまり、今回の調査により発見された 172 例は 1 例を除き、全て「cwung-ey iss-（中にあ（る））」か、「cwung-i-（中であ（る））」という述語形式のものであり、韓国語においては存在詞あるいはコピュラが存在しなければ、「VN 中」という形だけで対格と共起することは非常に稀であると言えよう。韓国語の母語話者によると、「VN 中」に存在詞もコピュラも後続せずに、VN の項が対格で表示されて現れた場合には、「動詞（「ha-」）が足りない」と感じるということであった。

しかし、(9) に挙げたような「cwung-ey iss-（中にあ（る））」、「cwung-i-（中であ（る））」の場合であっても、「VN 中」という特殊な構文自体が対格の存在を可能にしていることにかわりはない。なぜなら、存在詞（「iss-」）もコピュラ（「i-」）もそれ自体では、対格を許すことはできないからである。(11b, c) に示したように、存在詞「iss-」は下線の対格を付与することはできない。

(11) a. I kyosil-eyse yenge sihem-i iss-ta.
コノ 教室デ 英語 試験ガ アル
この教室で英語の試験がある。

b. *I kyosil-eyse yenge sihem-<u>ul</u> iss-ta.
コノ 教室デ 英語 試験ヲ アル
*この教室で英語の試験をある。

c. * I　kyosil-eyse　yenge-<u>lul</u>　sihem-i　iss-ta.
コノ　教室デ　英語ヲ　試験ガ　アル
* この教室で英語を試験がある。

また、(12b) に示したように、コピュラ「i-」も下線の対格を付与することはできない。

(12) a. Onul-un　yenge　sihem-i-ta.
今日ハ　英語　試験ダ
今日は、英語の試験だ。
b. * Onul-un　yenge-<u>lul</u>　sihem-i-ta.
今日ハ　英語ヲ　試験ダ
* 今日は、英語を試験だ。

すなわち、「VN cwung-ey iss-（VN 中にあ（る））」・「VN cwung-i-（VN 中であ（る））」の構文においても、日本語の「VN 中」（例、「刑事がその事件を調査中に殉職した」における「調査中」）と同じ統語的プロセスがおこり、対格の項を許可していると見なければならない。[18] つまり、韓国語の「VN 中」も、日本語の「VN 中／後」と同様に統語的複合語と見なしえるということである。

3. 考察

2 節に述べたように、塚本 (1997) が挙げた構文（(5)(6) のタイプ、Ahn 1991 の (7) の例文も同じ構造である）において「VN 中／後」は、対格を持つ名詞句と共起することはほとんどなかった。しかし、「VN 中 ey iss-（「VN中にあ（る）」）」および「VN 中 -i-（「中であ（る）」）」の構文においては、対格名詞句を持つ多くの用例を見いだすことができたことから、韓国語において VN と「中」との統語的な複合語化のプロセス（VN の「中」への編入）が存在しないとは言えないことが明らかになったと。つまり、VN の複合語化に関しては、韓国語においても日本語と同様に統語的なプロセスが存在すると言えよう。従来、(5)～(7) のタイプの例文の文法性判断のみが問題になってきたが、このタイプの構文が「VN 中 ey iss-」「VN 中 -i-」タイプの構文より、容認性が落ちるために、Ahn (1991)をはじめとする韓国人言語学者の立場と塚本 (1997) の対立が生じたのだと思われる。

韓国語の VN に関する塚本 (1997) の記述には、これ以外にも補足が必要なところがあると思われる。

まず、韓国語に統語的な複合語が存在するかどうかを論じる場合は、「VN-ha(-ta)」「VN-toy(-ta)」のような軽動詞と VN の複合語（例 (13)）も考慮する必要がある。これらに対応する日本語の「VN する」が、影山 (1993) によって統語的な複合語であると論ぜられているよ

うに、韓国語においてもこれらは統語的な複合語であると見なされている(Ahn 1990[19]; Park 1992)。

(13) Kyengchal-i ku saken-ul cosa ha-yess-ta.
警察ガ ソノ 事件ヲ 調査 シタ
警察がその事件を調査した。

本稿においては紙幅の関係上、「VN-ha(-ta)」「VN-toy(-ta)」の統語性についてはこれ以上論じない。しかし、韓国語における VN の数は非常に多いのであるから、このことからも、韓国語の文法において形態論が統語部門にほとんど関与しないとは言えないことになる。

また、塚本は「VN 中／後」が統語的な複合語である（つまり、一語である）根拠を、その形式における動詞的格付与に求めているが、動詞的格付与の事実は統語的な派生を前提とはしない。Iida (1987) は、「VN 中／後」の派生が統語部門以前に形態論的においてなされ、その過程の結果、動詞的格付与能力を得るとしている。また、「デモる」のような派生語の場合、名詞「デモ」に接尾辞「-r-」が結合し動詞「demo-r」を語彙的に派生したものであるが、その結果その派生語は動詞格の付与能力を取得する。つまり、語彙的派生語においても動詞格付与能力を得るものがあるということであり、「VN 中／後」の統語派生の根拠は別のところに求めねばならない。

本節の残りの部分においては、複合語「VN 中／後」が統語的に派生されることを示す根拠を提示する。まず、「VN 中／後」の語としての資格を示し、次に、それが句から統語的に派生するということを示す。

「VN 中／後」が複合語であることは、その語としての統一性 (morphological integrity) に求めることができる。その結果、VN と「中／後」の間には、(14) に示したように、助詞、テンス、副詞などの要素は介入できない。

(14) 語の統一性としての根拠

a. ku saken-ul cosa (-*lul) cwung-i-n kyengchal-un
ソノ 事件ヲ 調査（*ヲ） 中デアル 警察ハ…
その事件を調査中である警察は…

b. ku saken-ul cosa(-*nun) cwung-i-n kyengchal-un
ソノ 事件ヲ 調査 (*PRESENT TENSE)中デアル 警察ハ…

c. ku saken-ul cosa (*cikum) cwung-i-n kyengchal-un
ソノ 事件ヲ 調査 (*現在) 中デアル 警察ハ…

「VN 中／後」があるレベルにおいて句であり、後に統語部門において「中」に移動（編

入）したことを示すのは、以下のような根拠である。影山 (1993: 80) は、Postal (1969)[20] の「語彙照応の制約 (Anaphoric island)」の原理を引用して、「語（複合語を含む）の一部分だけが文中の照応に参加することはできない」とし、次のような例文をあげている。

(15) （影山 1993: 11 の例文。）
a. せっかく金魚をすくったのに、（その金魚が）逃げてしまった。
b. *せっかく金魚すくいをしたのに、逃げてしまった。

(15b) においては、「逃げる」の主語として、（語彙的）複合語「金魚すくい」の一部の「金魚」を先行詞としてとることができない。同様に、「語彙照応の制約」により、(16) の（語彙的）複合語「灰皿」の一部「灰」を「それ」の先行詞としてとることはできない。

(16) 灰皿に、それを捨ててください。

しかし、「VN 中」は「語彙照応の制約」には拘束されない。(17) に示したように、日本語においても韓国語においても、この構文においては、「訪問中」の一部「訪問」のみならず、それとともにその項をも含んだ「米国を訪問 (Mikwuk-ul pangmwun)」という部分を、「その (ku)」の先行詞としてとることが可能である。すなわち、「その目的」は「米国訪問の目的」として解釈することが可能である。

(17) a. 米国を訪問中である大臣に、その目的について聞いた。
b. Mikwuk-ul pangmwun cwung-i-n cankwan-eykey, kicatul-un
米国ヲ 訪問 中デアル 長官ニ 記者タチハ
ku mokcek-ul mwul-ess-ta.
ソノ 目的ヲ 聞イタ
米国を訪問中の長官に記者たちはその目的を聞いた。

「訪問」は「訪問中」の一部であることから、その部分が、照応関係に関わることは「語彙照応の制約」に違反するはずである。

しかし、もし (17) の「訪問」が派生のあるレベルにおいて、「中」との複合語を成しておらず、「米国を訪問」という句を構成しており、後に、編入により「中」と複合語を形成すると想定すれば、「米国を訪問」という部分が、照応関係に関与する理由が説明できることになる。つまり、「VN 中」は語でありながら、その一部「VN」が照応関係という統語現象に関与することから、VN と「中」はもともと独立に存在しており、統語の過程の中で VN が「中」に編入することにより複合語化されたと考えることが可能である。

以上、韓国語の「VN 中」構文は、「VN-ha(ta)」構文と同様に、統語的に派生された構文であり、韓国語には、日本語と同様に、VN 軽動詞と「VN 中」の統語的複合語が存在すると論じた。

4. 結論

本論文においては、韓国語における「VN 中／後」構文の位置について論じた。塚本 (1997) は、VN が動詞格の項をとる「VN 中／後」構文は、日本語には存在するが、韓国語においては非常に容認度の低い構文であると論じている。塚本は、その理由として、韓国語が、日本語とは異なり、統語的な複合語の形成をほとんど許さないことを挙げている。確かに、塚本 (1995, 1997) が主張するように、日本語の使役構文・可能構文・願望構文およびその他の複合動詞などにおいて、様々な統語的に派生される複合語が見られる一方、韓国語にはそれに対応する複合語は存在しない。しかし、本論文においては、韓国語にも VN を構成要素とする複合語が存在すると論じた。KAIST のコーパスを検索した結果、172 の統語的に派生したと見られる（対格と共起する）「VN 中」の用例が見つかった。ただし、これらの「VN 中」の用例は、塚本 (1997) が容認度が低いと論じた「VN 中／後」の構文とは若干異なり、172 例中171 例において、述語形式として現れた。すなわち、「VN 中」の後に存在詞かコピュラが現れる構文であった。このことは、塚本が論じたような、述語形式としては現れない「VN 中／後」の構文は、韓国語においては、容認度が低いことをも示していると思われる。

謝辞：本論文のデータ収集において、筑波大学の安平鎬氏から KAIST のデータに関して有益なアドバイスを得た。また、文法性判断に関して、学習院大学博士課程の柳慧政氏と国際基督教大学比較文化博士前期課程の황새미 氏に助けていただいた。ここに感謝申し上げます。本論における責任はすべて筆者にあることは言うまでもない。

註

1) 塚本勲「日本語と朝鮮語の系統①～⑩」『日本語学』 17-7～12, 18-1～4、1998-1999 年。
2) 本論文では、韓国語を Yale 式のローマ字により表記し、形態素ごとの訳をカタカナで示し、その下に日本語訳をつける。
3) しかし、Haig 1983 には日韓の提題助詞の微妙な違いが指摘されている。Haig, John. "Japanese *ga* and Korean *ka/i*," *Korean Linguistics*, 3, 1983, pp. 33-46.
4) 安　平鎬・福嶋建伸「中世末期日本語と現代韓国語のアスペクト体系 —アスペクト形式の分布の偏りについて—」『「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書』筑波大学、2001、pp.407-435。
5) 国立国語研究所『日本語と外国語との対照研究 IV　日本語と朝鮮語（上・下）』くろしお出版、1997。

6) 塚本秀樹「膠着言語と複合構造 —特に日本語と朝鮮語の場合—」仁田義雄（編）『複文の研究（上）』くろしお出版、1995、pp.63-85；塚本秀樹「語彙的な語形成と統語的な語形成 —日本語と朝鮮語の対照研究—」『日本語と外国語との対照研究 IV　日本語と朝鮮語（下巻）』国立国語研究所、くろしお出版、1997、pp. 191-212。

7) 井上和子『変形文法と日本語（上）』大修館書店、1976；柴谷正良『日本語の分析』大修館書店、1978。

8) 影山太郎『文法と語形成』ひつじ書房、1993。

9) Martin, S. E. *A Reference Grammar of Japanese*, the Yale University, New Haven, 1975.

10) Iida, Masayo. "Case assignment by nominals in Japanese." In M. Iida, S. Wechsler, & D. Zec, eds., *Working papers in grammatical theory and discourse structure: Interactions of morphology, syntax, and discourse*, CSLI, Stanford, CA, 1987, pp. 93-138.

11) Shibatani, Masayoshi, & Kageyama, Taro. "Word formation in a modular theory of grammar: Postsyntactic compounds in Japanese," *Language*, 64, 1988, pp. 451-484.

12) 塚本 (1997)、前掲論文、p. 208。

13) Ahn, Hee-Don. *Light verbs, VP-movement, negation and clausal architecture in Korean and English*, doctoral dissertation, University of Wisconsin—Madison, 1991; Park, Kabyong. *Light Verb Constructions in Korean and Japanese*, doctoral dissertation, University of North Carolina at Chapel Hill, 1992; Lee, Young-Suk. "Case licensing and scrambling," *Language Research*, 30, 1, 1994, pp. 181-204; Chae, Hee-Rahk. "'ha-'uy thukseng-kwa kyengswule kwumwun [Properties of *ha-* and Light Predicate Constructions]," *Ehak Yenkwu*, pp. 409-476, 1996.

14) 韓国科学技術院、専門用語言語工学研究センター（문화체육부와 과학기술처의 연구과제 국어정보처리기반구축과 STEP2000에서 구축된 KAIST 코퍼스）を使用、http://scfive.kaist.ac.kr/kcp/。

15) KAIST のコーパスには、VN と「中／後」の複合語を「語節」として扱った場合と「中／後」を独立の語節として扱った場合がある。前者の場合も数多く見られるが、本論文においては検索操作の問題上、後者の分かち書きされたもののみを対象とした。分かち書きされていないコーパスを含めた場合、本調査をはるかに超える対格の項と共起する VN の用例を見出せると思われる。

16) 助詞「中／後 ey」を対象とした場合、助詞「中／後 eyse+」を含む例は検索から排除した。また、「cwung-i+」「hwu-i+」の例には、今回の検索対象とは関係ない「重耳（人名）」「cwung（僧）」「中耳炎」「中人」「後人」「Hwuiseyn（人名）」などが含まれていたので、それらを検索件数から排除した。

17) 「VN-hwu-ey」と VN の対格の項を含む例が 1 例あったが、2 名の韓国語母語話者により、完全な適格文とは見なしがたいと判断されたために、本論文においてはカウントに含めなかった。

18) 「VN 中／後」構文がなぜ動詞格を許すかについては様々な仮説がたてられている。Sato (2000) に様々なアプローチが紹介されている。Sato, Yutaka. "Some evidence for a zero light verb in Japanese." In M. Nakayama & C. Quinn, eds., *Japanese/Korean Linguistics*, volume 9, CSLI, Stanford, CA, 2000, pp. 365-378.

19) Ahn, Hee-Don. "On Light Verb Constructions in Korean and Japanese." In H. Hoji, ed., *Japanese / Korean Linguistics*, CSLI, Stanford, CA, 1990, pp. 221-237.

20) Postal, Paul. "Anaphoric islands," *CLS 5*, 1969, pp. 205-239.